



談話の文法－「題目」に関する総合的研究－

金田, 純平

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2008-03-25

(Date of Publication)

2012-03-02

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4286

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004286>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 金田 純平
博士の専攻分野の名称 博士（学術）
学 位 記 番 号 博い第 731 号
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の日付 平成 20 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

談話の文法－「題目」に関する総合的研究－

審 査 委 員

主 査 教 授 定延 利之
教 授 林 博司
准教授 林 良子
教 授 中川 正之
筑波大学人文社会科学研究科教授 砂川 有里子

論文内容の要旨

氏名 金田 純平
専攻 コミュニケーション科学専攻
指導教員氏名 定延 利之 教授

論文題目

談話の文法—「題目」に関する総合的研究—

論文要旨

ヒトが発話する、あるいは文を生成する場合、どのような表現から始めるのであろうか。日本語では、まず、係助詞「は」でマークされる名詞句、すなわち主題が文頭（あるいは「発話頭」）の要素の典型として考えられる。この「は」句で現われる主題は、例えば「この映画は笑い」と涙に満ち溢れている」における「この映画は」が「この映画について言う」と言い換えられるように、この文（発話）が何れに対しての言及であるかを言語的に提示するものであるといえる。

また、「雨が降ってきた」のように主題を取らない文（無題文）では、「が」でマークされる名詞句すなわち主語が文頭に現れやすい。主題と主語は通言語的に文頭に現れやすい要素である (cf. Li and Thompson 1976)。その背景には文の構造として主語—述語 subject-predicate, 主題—説明 topic-comment / theme-rheme の二つがあり、言語の線状性に従う形で、多くは新情報を担うこととなる述語および説明が文において後（右）に置かれることに関係している。そのほか、主題・主語以外にも時間や場所、理由表現などの名詞句で始めることも多い。

以上のことは書き言葉の文法についてであるが、こと話し言葉になると、その文頭ならぬ「発話頭」の要素のパラエティはさらに豊かになる。例えば、「は」や「なら」のような主題に類するものを取ってみても、「って」を伴うものや無助詞名詞句のように主題的要素として現れるものがある。これらの主題的要素は、例えば「は」を使うと不自然となるような、先行文脈に現れていない指示物を主題的に提示して言及する場合に使用されることが挙げられている。また、新たな話題を談話に導入する場合で、かつ恐らく聞き手がその話題となる事物を知らないと話し手が判断する場合には、「は」や「って」のような助詞ではなく、次のように節の形で話題導入を行う場合がある。

本研究では、日本語の談話において発話頭に現れる様々な要素を「題目」として再定義し、発話の最初に現れるということの意味に注意しながら、発話に際しての話し手の意図と言語形式の対応について考える。なお、本稿の「題目」の語は、一般に国語学で用いられる題目を拡張した概念として位置づけているが、非常に紛らわしいことは否めない。そのため、以降、本稿でいうところの「題目」はすべてカギ括弧をつけた「題目」として、従来使用されている意味での題目と区別して使用することとする。

発話頭の要素には、そのほか感動詞（「あっ」「えっ」など）や、呼びかけ詞（「あんた」「太郎くん」「先生」など）、あるいは「ねえ」「なあ」「はい」「いいえ」などのいわゆる「文」の要素から外れるものもあるが、これらは発話の最初に現れることが多く、また談話上非常に重要な役割を果たしていることから、決して無視するわけにはいかない。

接続詞と副詞（特に「陳述の副詞」）は、類似性がまた主題や時間・場所表現と同様に発話頭（文頭）に現れやすい。特に接続詞は、書き言葉・話し言葉ともに談話（文章）の展開に大きくかかわっていることは明らかであり、その点において主題とも密接な関係があ

ると思われる。

感動詞や呼びかけといった話し言葉に属するような表現も発話頭に現れやすい要素である。これらは、命題に直接関わらないことから副詞的であるとされ、その意味では先ほど見た接続詞などに近い。感動詞については、たとえば発見したときに現れる「あ（っ）」は発話頭に現れるのが必然的であって、発話の中間や末に現れるのはきわめて不自然である。

このことは極々当たり前のことなのかもしれないが、主題や接続詞が発話の最初に現れやすいことと、感動詞を発してその後に叙述を行うという行動を考えてみると、あながちまったく別のものであるとは言い切れないであろう。また、感動詞の中には、友定(2005)の提唱する「立ち上げ詞」もあるが、これは発話の最初に現れるという点で、本研究でいうところの「題目」の考え方にも対応している。

次に呼びかけであるが、これも発話の最初に現れやすいことと、想定する聞き手を言語によって指定し働きかけようとするという行動を考えると、主題の提示にもつながってくるのではないだろうか。

そのほか「題目」の候補になりそうなものとしては、いわゆる「前置き」的発話や、語りの発話で現れるようなオノマトペの独立用法なども考えられる。前者の前置きの発話は話題の導入にも、「ところで」のような話題転換の接続詞にも似ている。後者の「ポチャーン」は、今まであげてきたような「題目」の候補とは似ても似つかないように見えるが、「ねこがポチャーンで池に落ちよってん」とは違って、「ポチャーン」という状況を再現するようなオノマトペと、その状況の説明とも解釈できる「ねこ池落ちよってん」の間に断絶があると見れば、主題—説明構造のような二分構造にもつながってくる。「ポチャーン」が主題であるとは到底考えられないが、最初に「ポチャーン」を発話することと主題を文頭に提示することは、あながち遠いものであるとは言い切れない。

以上、「題目」として定義できるような表現の候補をいくつか見てきたが、問題点として「題目」と認めてよいものの範囲をどこまで拡張するのかということが浮かび上がってくる。しかし、本研究ではとりあえず文ないし発話の最初に現れやすいものを「題目」としたことから、文の中核をなすような主題や主語といったもの、文（発話）頭に現れる時間・場所といった出来事背景となるような状況を示す表現が中心的なものとなる。しかし、あくまで最初に現れるということにこそ「題目」の問題設定の意味があるという見地から、本節で見たような接続詞や感動詞などの、従来の文論ではやや周辺のなものも「題目」として取り扱う。これらの一見周辺的と思われる要素も発話においては非常に大きな役割を担っており、これらを「題目」として同等の考察を加えることによって逆に、従来の中心的なテーマであった主題や主語、時間・場所表現に対して新たな示唆を与えることも可能になる。

本研究では、日本語の話し言葉についての、発話の最初に現れるものを考察する。その場合、伝統的な文法研究、特に主題など「題目」に関するものが書き言葉での現象について取り上げられることが多く、聞き手とのやり取りといった、話し手の環境とのインタラクションが常に関わる現場依存性のある話し言葉について取り扱う場合には、文法的な問題だけでなく、語用論的な要因が発話における文法性に関わってくる。つまり、話し言葉すなわち「談話」における文法について注目する必要がある。

また、主題など「題目」に関わる研究は、多くの場合形態・統語論的に扱われることが多く、そのときに関係するピッチやイントネーションパターンについての観察が行われていることが少ない。フランス語などのロマンス諸語や現代ギリシャ語においては、主題提示が話し言葉で頻繁に行われる点で、統語的インタフェースと韻律的インタフェースの両面からの記述・分析が行われ、大きな成果を挙げている。また、外国語との主題に関する対照的研究は益岡(2004)でこそ本格的に行われているものの、特にフランス語に限って言えば、フランス語文法研究の枠組みみで行われているものが多く、日本語との対照が本格的に行われているとはいえない。そこで本研究では、フランス語および現代ギリシャ語を中心に日本語との主題についての対照研究を、文法面と韻律面の両方から行うことにした。タイトルにある「総合」とは、今まで個別に扱われることが多かった文法と音声、日本語

の主題とフランス語の主題といったことを対照の見地から、一枚岩に収めようとする試みとしての意味が込められている。

本研究では、1節に挙げられているような、発話の最初(またはそれが連続する場合も考え、その近傍)に現れる言語要素を「題目」として捉え直す。そこから二段階に分けて、日本語の「題目」の談話に対する役割についての調査研究を行うことで、ヒトが発話に「題目」を使用するメカニズムを解明する。これが本研究の目的である。第一段階は、「題目」が談話上で果たす役割についての記述と分類を行う。ここでは大別して①「題目」の文法的特徴の対照研究と、②「題目」に関わる韻律の特徴の研究の二つに分かれるが、これらは完全に区別して取り扱えるわけではない(理由は次章以降に記す)。①②については、おもに主題に関係する表現を取り扱うが、そこで得られた枠組みを、拡張された「題目」にも適用できるか、あるいは適用できるなら「題目」のプロトタイプ的なものとしての主題と、感動詞や接続詞などの拡張「題目」との異同について調査する。

第二段階では第一段階で得られた知見をもとにして、ヒトが発話になぜ「題目」を用いるのか、あるいは、どのように「題目」の形式を選択しているのか、話し手の意識に基づいた談話の生成モデルを提案することを最終の目的とする。

本稿では前節で述べた第1段階についての知見を第2章から第6章において紹介する。

まず、第2章から第4章では「題目」の中心的な位置を占める主題表現についての形態的・構文的特徴についての考察を行う。第2章は本研究の「題目」の枠組みにおける主題の提示についての、これまでの文献での考え方をまとめて、本稿における主題の位置づけを行う。

第3章では、ロマンス諸語(特にフランス語)および現代ギリシャ語の話し言葉に特に見られる主題提示表現としての左方転移構文について取り上げる。また、情報構造に関わる主題・焦点と韻律に強い関係があることから、言語形式だけでは音声形式についても構造に含める必要がある。また、左方転移構文や主題化構文、焦点化構文は命題よりも前の左周辺部 left periphery に主題を置くこととされるが、日本語の文において左周辺部が存在するのか、あるいはどのような位置づけができるのかについて考察し、「題目」の構文的特徴の枠組みを模索する。

第4章は日本語の句末形式の韻律に注目する。第3章で見たロマンス諸語・ギリシャ語の左方転移構文は明らかに転移成分である句(イントネーションユニット)のピッチパターンには、主題提示のための特有な韻律形式が見られず、句が一つのイントネーションユニットを構成する場合の無標なピッチパターンを取る。この点は日本語においても多く見られるものであり、句(イントネーションユニット)単位でその末尾に特徴的なイントネーションパターンが確認される。この章では日本語の昇降調イントネーションについて取り上げ、非計画的発話に基づく非流暢性とそこ潜む心内処理と発話行動の面から考察を行う。そして、心内処理に関わる主題提示の問題を、非計画的発話の面から考察し、日本語における主題についての認知的側面について特徴を紡ぎ出す。

第5章・第6章では日本語における各種の「題目」についての特徴について取り扱う。第5章では、日本語の話し言葉に特徴的な主題提示表現を形式である無助詞と「って」についての談話的・文法的特徴についての観察から、そこに潜む心内処理について考察する。また主題的無助詞とこれに意味的・語用論的に対応するフランス語の文との対象を行い、日本語の主題卓立性についても考察する。

第6章では、第3章・第4章で行った言語間対照から浮き彫りとなった日本語の主題に関係する構文的・韻律的特徴を踏まえて、接続詞や感動詞、呼びかけなど従来周辺的とされてきた「題目」についての考察を行い、これらが主題や状況設定といった、典型的な「題目」と近似性について論考する。

最後に第7章で、「題目」に関する諸相についての取りまとめを行い、第二段階すなわち「題目」がどのような発話上の行動に関わっているのかを考察する。

論文審査の結果の要旨

氏名	金田 純平		
論文題目	談話の文法 — 「題目」に関する総合的研究 —		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	定延 利之
	副査	教授	砂川 有里子
	副査	教授	中川 正之
	副査	教授	林 博司
	副査	准教授	林 良子
要 旨			
<p>本審査委員会は、金田純平氏の提出した「談話の文法—「題目」に関する総合的研究—」について審査し、以下の結果を得た。</p> <p>金田純平氏の研究は、日本語、フランス語、ギリシャ語、英語の通言語的観察の比較対照をふまえて、文開始部(本論文の「題目」)の通言語的多様性と普遍性の解明を目指すもので、多くの言語研究者にとって有意義な論考を含む、価値の高い研究と言える。</p> <p><各章の概要と評価> 本論文は全部で7章からなる。</p> <p>第1章では、上述した「題目」の定義とともに、本論文の目的と手法、さらに本論文の構成が紹介されている。</p> <p>第2章は、「題目」の中でも中核的な位置を占める「主題」を、先行研究をもとに特徴づけるために設けられたもので、第1章の目的と、第3章以降の具体的な現象考察をつなぐ部分にあたる。</p> <p>第3章では、日本語、フランス語、ギリシャ語、英語を対象に、主題の通言語的観察が語彙・形態・統語・音声の総合的な観点から展開され、その言語的多様性と普遍性が具体的に示されるとともに、それらをプロトタイプカテゴリーにとらえる</p>			

上での「題目」の必要性が説かれる。

第4章～第6章は、以上の「題目」という概念発想に基づき、現代日本語の文開始のさまざまなパターンが観察されたものである。第4章では、昇降調イントネーションや延伸ポーズ、フィラーといった非流ちょう要素が、主題の設定に関わっていることが指摘されており、その過程には第3章の観察、特に、フランス語およびギリシャ語の非計画的発話における吊り主題左方転移 (HTLD) の主題提示に関する観察が活かされている。

第5章では、話しことばに特有の無助詞と「って」による主題提示の相違について、話し手心内の認知行動から説明が試みられ、「って」が対比に関わる積極的な心内処理に対応しているのに対し、無助詞がそのような処理と関わらず選択指定にのみ対応していると論じられている。

第6章では、接続詞、感動詞、呼びかけ、文副詞、さらにショーアップ語といった、伝統的には別物と考えられていた雑多な表現が、題目語の名のもとに扱われ、「枠組み設定」機能、さらに発話行為の前触れ機能という、共通の談話機能が抽出されるに至っている。

第7章では以上の観察と提案がまとめられ、今後の展望が述べられている。

<全体的評価> たとえば第3章で、時間・場所表現といった「題目」が命題の最左端に存在する前置焦点のスロットとは別もので、より先行するものであるという観察など、本論文には従来指摘されていない観察が随所に展開されており、十分な独自性が認められる。また、考察対象であるさまざまな「題目語」についても、豊富な具体例の提示をふまえた実証的な記述が展開されている。絵花的な印象が払拭しきれず、一部のデータの分析にも改善の余地がある箇所があるとはいえ、逆にそれは今後の発展を期待させてくれるものと言える。さまざまな言語、現象、領域にまたがる膨大な先行研究を踏まえた上で懸命に独自の論を進めようとする姿勢には好感が持てる。十分なものではないとはいえ、丁寧な記述、わかりやすい例の提示など、自らの主張を理解してもらおうとする工夫と努力も見えてとれ、高く評価できる。

レフェリー付き論文及びこれに準じる論文に該当する論文は、『国際文化学』17号所収の「無助詞構文の方言間対照—備中方言と大阪方言を中心に—」(2007年)と、Disfluency in Spontaneous Speech 2005所収の“phrase-final rise-fall tone and disfluency in Japanese” (2005年)である。以上の結果をふまえて本委員会では審議を行い、全員一致で、学位申請者金田純平氏は博士(学術)の学位を得る資格がある、との結論に達した。